

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2006～2008

課題番号：18791664

研究課題名（和文）

2児の親となること—第2子妊娠から出産後の母親及び父親の役割適応プロセスの相違—

研究課題名（英文）

Becoming a parent of two children—The difference of the adaptation process of the role of mothers and fathers from pregnancy to post-delivery of the second child.

研究代表者

坪田 明子 (TSUBOTA AKIKO)

滋賀医科大学・医学部・非常勤講師

研究者番号：10324691

研究成果の概要：

本研究は、第2子妊娠期から出産後において、まだ幼い第1子を育児しながら第2子を迎える母親および父親がどのように2児の親になっていくのか、その役割変化適応過程の相違を明らかにすることを目的として行った。研究方法は、半構成的面接法を用いた縦断的調査である。母親および父親8組を対象に、妊娠末期、産後1～2ヶ月、産後6～7ヶ月の計3回、インタビューを行ったが、うち2組は研究対象の条件から逸脱したため、分析対象は6組となった。インタビュー内容を逐語録に起こし質的記述的に内容分析を行った結果、産前においては、母親と父親の第2子を迎えることに対する意識の違いが見られたが、産後6ヶ月～7ヶ月においては、母親と父親の意識が類似している様子が伺われた。また、第2子の出産後、お互いに対し、親としておよびパートナーとしての信頼が深くなったことが語られた。第2子を迎える過渡期における母親および父親は、第2子の誕生を通して、より親としての意識が高まったと語り、その過程においては、第1子の妊娠・出産の時とは異なるサポートを必要としていることがわかった。助産師は、初産婦とは異なるニーズを把握し、経産婦独自のサポート体制を整える必要があることが示唆された。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,500,000	0	1,500,000
2007年度	900,000	0	900,000
2008年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	120,000	2,920,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：母性・女性看護学

1. 研究開始当初の背景

少子化が進み、合計特殊出生率は低下している。臨床現場においても、保健指導や両親学級は初産婦を中心としているが、子どもを持つ親の8割は2児または3児の母親である。

第2子を迎える過渡期において、夫婦は2児の親となることへの役割適応を期待される。この適応過程において、第2子妊娠や出産を機に「第1子が可愛く思えない」「第1子に対していらいらする」といった否定的な

感情が強くなったという母親の声が多く聞かれている。虐待の研究においても、虐待のリスク要因として第2子を迎える経産婦が指摘されてきており、昨今、2児の母親へと役割変化が生じる過程において、母親の適応が困難であることが予測されるようになってきた。

第2子妊娠・出産により、母親は第1子誕生の時とは異なった課題に直面するが、第1子にとっても第2子の出現は、母親との関係を脅かされる出来事であり、多くの児に退行現象が見られる。この適応過程において、第2子妊娠中の母親と第2子の関係が重要であると言われているが、経産婦に関する研究は、妊娠期または産後1ヶ月など、一時点における初産婦との比較を量的に調査した研究が多く、経産婦独自の特徴を明らかにした研究は少ない。そこで研究者は、先行研究にて、第2子妊娠各期の母親の第1子への養育意識とその影響要因を調査した。その結果、母親の養育意識は妊娠各期で差はなかったが、養育意識へは父親の姿勢が影響していた。一方、質問紙の自由記載には、第2子妊娠中の母親が第1子との関係性においてストレスを感じていること、同時に今までどおりに接することの出来ないことからくる愛しさを感じており、アンビバレントな感情を抱いている様子が読み取れた。その結果をさらに深めるべく、質的研究にて第2子出産前後の母親にインタビューを行ったが、母親の養育意識は父親の姿勢が影響するが、2児の親となることへの意識の変化について、母親のほうが父親よりも早い様子が伺われた。

2. 研究の目的

本研究は、第2子妊娠期から出産後において、まだ幼い第1子を育児しながら第2子を迎える母親および父親がどのように2児の親になっていくのか、その役割変化適応過程の相違を明らかにすることを目的として行った。

これらが明らかになることで、第2子を迎える過渡期における夫婦の親役割適応過程への理解を深めることができ、妊娠中から出産後にかけての家族援助の考察の一助となると考えた。

3. 研究の方法

半構成的面接法にて、産前・産後1~2ヶ月・産後6~7ヶ月の計3回行い、縦断的調査を行った。インタビューは、母親および父親それぞれに対し行い、お互いの意見が影響しないよう考慮した。

対象者のリクルートは、研究の趣旨を説明し、許可を得られた病産院および社会的活動の場にて行い、調査対象者へは、研究の目的・内容・面接の概要およびプライバシーの

保護等を説明し、倫理的配慮を十分に行った。また、研究参加の途中で中断および辞退しても対象への不利益がないことを説明し、妊娠中や産後の状態に合わせて、インタビュー日程の調整を行った。

4. 研究成果

(1) 研究対象者

母親および父親8組を対象としてインタビューを行ったが、妊娠経過等により研究対象の条件から逸脱したため、分析対象は6組となった。母親の年齢は28~36歳、父親の年齢は28歳~40歳、第1子の年齢は初回インタビューにおいて1~2歳であった。

(2) 分析

分析は、インタビュー内容を逐語録に起こし、質的記述的に内容分析を行った。

(3) 結果

妊娠末期および産後1ヶ月のインタビューにおいて、第2子妊娠経過中における母親の一番の気掛かりは、第1子のことであった。「第2子妊娠によって、今までどおりに第1子に接してあげられない」「体調が悪くいらしがちであった」「外遊びを十分にさせてあげられなくなった」などの発言が聞かれ、妊娠経過の中では、つわりの時期およびお腹が大きくなる妊娠後期が特に、育児行動へのストレスの高まりがあったことが語られた。同時に、まだ母親に甘えたり抱っこしたりして欲しい年齢である第1子に、今まで同様に対応できないことへの申し訳なさを感じていた。また、母親は、妊娠中より産後の生活の変化を気にかけており、まだ手のかかる第1子と、新しく生まれてくる第2子を同時に育児することを具体的にイメージしようと試みたり、気にかけていたりしていた。

一方、妊娠中のインタビューにおいて父親からは「第1子の時より心配がない」「前回もどうにかなったから、どうにかなるだろう」という楽観的な意見が多く聞かれた。

産後1~2ヶ月のインタビューでは、児の誕生を迎え、母親および父親ともに、新たな生活を軌道に乗せようと協力している様子が各々のインタビューより伺われた。特に父親たちからは、「こんなに大変だと思わなかった」という発言が聞かれ、実際に第2子が誕生して初めて、2人の子どもを同時に育児する大変さを実感したと話した。

産後6~7ヶ月のインタビューでは、母親および父親ともに、第2子を交えた新しい生活に慣れてきている様子が語られ、母親と父親の意識が類似している様子が伺われた。また、第2子出産後に、お互いに対し、親としておよびパートナーとしての信頼が深くなったことが語られた。

第2子を迎える過渡期における母親および父親は、第2子出産を通して、より親とし

ての意識が高まったと語り、また、妊娠から産後の過程において、第1子の妊娠・出産の時とは異なるサポートを必要としていることがわかった。

(4) 考察

助産師は、第2子妊娠から産後における母親および父親について、初産婦とは異なるニーズを把握し、経産婦独自のサポート体制を整える必要があることが示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

坪田 明子 (TSUBOTA AKIKO)
滋賀医科大学・医学部・非常勤講師
研究者番号：10324691

(2) 研究分担者

なし ()
研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ()
研究者番号：